

かった者が60%ほどもあり、休日もよく、ただ食品バザーの当日券がほしいこと以外は文化祭を楽しく過した者が多かった。

「これからはバザーもいいけれどクラブ発表にもっと関心をよせてほしい」「意欲的になるのがおそすぎたと思う」「学年で合同練習を早めにする、ライバル意識がでてきてよいと思った。」「フォークダンスはともかく楽しかった。年の大きな行事の時ぐらいこんなことがあってもよいと思う」「毎年高校生にひっぱられるとか、中学は何もしないとかいわれるが今年は中学独自の音楽コンクール、フォークダンスなどがありずい分

進歩したと思う。」「来年は何か積極的に参加してみたいと思います。」「中学は高校のお客様みたいでお金を使いすぎた。」以上は中学生の反省のことばをあげたものである。小文化祭も秋の中高合同の文化祭もどちらも問題は色々あって考えさせられてしまう。こうしたことを考える時、文化祭という名前ですべて中途半ばなことをおこなうより、単独に映画会、講演会、音楽会などを分解して1日又は半日をあてて各学期にふりあてて行事をするというのいいのではないだろうか。文化祭とはどんなことをするものなのか、もう一度考えてみる必要があると思われる。

〔Ⅲ〕文化祭—その報告と私見

山 田 雄 一

(1) はじめに

本校における年間最大の生徒会行事は、やはり文化祭であろう。多層化された生徒¹⁾が、しかも中、高合同という本校独特の組織の中で造り出す一つの大行事、そこには数々の問題・苦労はあるが、生徒の自主的活動という柱²⁾のもとに、教材外特別活動のもつ大きな教育的意義があるはずである。そして中・高合同で行う本校文化祭は、まさに、多層化の中での生徒指導をどうするか、という我々の昨年からのテーマの集約なのである。そこで、昨年度の文化祭実践のあらましを報告すると共に、そこで生じた問題点を検討し、文化委員会顧問として痛感した私見をここで述べておきたいと思うのである。

1) 本校研究紀要第21集 参照

2) 本校研究紀要第20集 参照

(2) 文化祭報告

＜資料1＞ 文化祭の準備経過概略（高校中心）

4/28 文化委員会

委員長、副委員長、書記決定

本年は、文化祭を行うのなら、準備をできるだけ早くやることを確認。

5/10 文化委員会

前年度の文化祭を反省して、文化祭についての意見を各クラスでまとめてくる。

5/24 文化委員会

本年度、文化祭をやりたいのか否かの大前提を各クラスで人数を調べる。（一般生徒の文

化祭に対する関心を高めるのが意図）

6/1 大半が文化祭をやりたいという。その理由は「楽しく意有義な時間を持ちたい」「一つの目標をもって学生生活が楽しめる」等。

6/4 文化祭で何をやるか討論

第1回アンケート実施。（資料2参照）

6/23 アンケート結果から日程 内容検討

6/30 日程3日案出る

7/10 休日を入れた場合の対策検討、招待状、警備に関して。

分科会に変わって文化講座を行うことに決定。バザー・部クラ・個人発表受付。

ポスター・表紙・歌詞等募集。（夏休みに製作を呼びかける）

日程2日案の原案作成。

7/12 中高合同文化委員会

講演候補者選出→各クラスで希望調査。

7/14 講演者交渉順位決まる。（1位金田一春彦）

日程2日、3日でもある。（→内容次第）

9/2 講演者決定、それに伴うプログラム変更。

音コン去年並みで実施を告示。

映画アンケートを実施。

9/8 文化講座申し込み少のため広く募集。

内容の大筋きまり、日程も11/1の午後準備11/2.3文化祭、ということに確定。

9/12 映画アンケート出る。（1位 神田川）

招待状形式の意義検討。

バザー・発表の場所配置

9/中 映画内容でもめる。原案完成。

- 9/28 文化祭原案、議会で検討。
 10/初 “神田川”の在庫がなく、在庫のある映画で再アンケート。プログラム編成。それに併い、1日の午後、高校音楽コンクールをすることに決定。
 10/中 文化講座、13講座出そろい、生徒に伝達。映画決定。(ジョニーは戦場に行った)
 原案議会通過(教官会議に大筋を中間報告)
 11/1 高校音楽コンクール。
 11/2.3 当日

以上のように経過したわけであるが、本年度は早く準備にとりかかった割に、具体的にはなかなか決まらず、準備段階としてはうまくいったとはいえない。こういった行事は、当日までの準備に、その意義が多分にあるということは言うまでもなく、特にてまどった例をここにあげて研究課題とする。

(例1) 日程

結局のところ、2日プラス高校音楽コンクールが前日にはみ出す、という形となったが、休日を含めるかどうかの問題もからめて、相当難行した。というのは4月の時点で、一週間案を打ち出すものもいて、長ければ楽しいという、内容の伴わない安易な考えを主張する者もいるからである。そして大半の生徒は“文化祭を盛大にやりたい”“楽しくやりたい”という希望のため、期間の長い方が支持が多くなる。最初にわくを確保して、内容は後からあてはめてゆくという考えである。当然のことながら教官側はそれを否定し、内容充実という方向に視点を向けさせ、2日間か3日間かは内容がはっきりしてから、という態度で一学期を終えたのである。実際、この時点では、大半の生徒の関心はまだ先の文化祭よりも、目前の諸行事でいっぱいなのであった。もちろん、これまで2日間で行ってきた文化祭のわくを広げることは大改革であり、我々としては簡単に認めるわけにはいかない。しかし、そういった指導は、内容が伴えばわくを広げようという方向がなければできない。2学期に入って、準備、後かたづけをしっかりとって充実した文化祭をやろう、と生徒が真剣に取り組んだあげくの本案は、形としてはまとまりのないものであったが、内容からわくを考えていった結晶であると考えられる。その結果、当日スムーズに進行できたともいえる。これは、こういった長期間の内容とわくとの検討の生み出した一つの成果であろう。そして安易にわくを広げられないと同様に、決まったわくに安易に内容を押し込むべきでもないという一つの結論に達したのである。

しかし、日程問題に時間をとられすぎて、内容充実への準備が遅れたのは事実であり、4月、5月の時点から内容の概要を決定し、なるべく早くそれに向かっ

て準備してゆくように指導してゆくのが最良であったと反省している。文化祭とは、それまでの学習活動の発表の場でありたいからである。

(例2) 映画

「その目的はすぐれた教育映画を見せて、映画を見る喜びを満足させ、教養を高め、生活指導に役立て、映画の見方を伸ばし、集会での態度を育成して人間づくりをする。」(学校教育全書⑩“特別教育活動・学校行事など”P372 映画鑑賞のねらい)

準備段階で最も教官側と生徒側に対立の起こった問題は映画の選択である。パンフレットを参考に作成した文化委員会による映画アンケート(第1回)の結果、中学、高校共に“神田川”が群を抜いて支持を得た。一般常識からいって、これが“教育的にすぐれた映画”の部類に入るはずはない。もちろん我々も生徒の大半もこの映画を実際に見てはいないのであるから、パンフレット等から内容を判断するわけであるが、生徒との間に大きな対立が起こったのは言うまでもない。しかし、ヒットしたその主題歌の知名度や、性に大きな関心をもつ中・高生ということから判断すれば、アンケートでトップになるのは当然の結果であり、さあ交渉に入ろうという段階で、「良い映画ではない」とクレームをつけるのはあきらかに誤りであり、手落ちであった。

しかし、私個人としては、アンケートの段階でそういう映画を抹殺しておけばよかった、というような安易な反省はしていない。“神田川”是非論の中で大いに考えさせられるものがあったからである。“神田川”の非を唱える我々に反発する生徒たちとの対話の中に支配体制への反発もあろうが、それ以外の目の輝きを見たのである。生徒の自主性を生かした指導方針である以上、それを前面からとりあげて行くべきではなかったか。或いはアンケートの段階でもっと内容のある話し合いはできなかったか。もし、映画を通して「映画を見る喜びを満足させ、教養を高め、生活指導に役だて……」ようとするならば、教育的にすぐれた映画をおしつけるのでは効果がないのではないか、もちろん効果のある生徒も多いだろうが、その前に見ようとする意欲、気構えに欠ける生徒も多いだろう。情報氾濫の現代社会で、悪情報には目をつむらせ、耳をふさがせる教育は、かえって屈折した反発となろう。

我々は神田川の非を押しつけずに、あらゆる角度からは是非論を戦わした。結局は映画会社に在庫がなく、別の映画を上映することになったが、何回かの話し合いは、“生活指導に役だち、映画の見方を伸ばした”と思う。しかし、話し合いに参加した生徒はごく一部である。もしも、中学生を含め全員が、その問題に正面から取り組んでいったなら、神田川上映は大いに教

文化祭— その報告と私見

育的価値のあるものだったに違いない。興味本位で出発したにせよ、興味こそ教育効果をあげる最大の柱だからである。

私は、顧問教官としては非を唱えたものの、私的には以上のようなことから上映したかった方である。しかし、教官の意見がバラバラではその指導効果は大きく崩れる。今後もこういった問題は必ずおこってくるので、我々は一つの大きな指導方針を持って、生徒の興味を生かした指導体制をとりたいものである。

<資料2> 高校生対象に6月に行ったアンケート(抜粋)(以下アンケート結果はすべて百分率に換算したもの)

1. 文化祭は行う方が良いと思うか Yes 93.1%

理由：楽しみの場・発表の場・生徒の自主制を伸ばす場・他校への紹介等。

2. 講演は行う方が良いと思うか Yes 56.2%
理由：文化祭の一つの柱に、数少ない機会を有効に。
3. 映画を行う方が良いと思うか Yes 86.5%
理由：文化祭の柱、見たい、楽しめる。
4. 音楽コンクールを行うべきか Yes 70.2%
理由：クラスのまとまり、全員参加として貴重。
5. 休日を入れるべきか Yes 72.3%
理由：他校との交流、活気が出て盛り上がりやりがいがある。

<資料3> 文化祭プログラム(51年度)

		8:40				13:00			15:30		17:10
11月1日(日)	体育館						音楽コンクール(高)	あとかたづけ準備	体育館		
	教室						授業	合唱練習(中)	準備	教室	
		8:40	9:00	10:30	11:10	12:10	12:40	13:20	15:00		
11月2日(火)	体育館	開会式	音楽コンクール(中)	フォークダンス(テニスコート)(中)	ブリーラコ発表(中)	優秀クラス発表(音楽コンクール(全))	講演(全)(日本語の魅力)	準備	体育館		
	教室	文化講座(高)	あづかた	(昼食)			準備	教室			
		8:40		11:00		13:00		15:00			
11月3日(水)祝日	体育館	出欠チェック	映画(ジョニーは戦場へ行った)	演劇部発表(たたかい)	グループ発表(ロックコンサート)	閉会式	あと片付け	体育館			
	教室	準備	バザー・展示	あと片付け	教室						

<資料4> 文化祭後11月に行なったアンケート結果(抜粋)(単位%)

1. 日程(2日半)の長さは

- a 長すぎた 中 8. 高 4.9 全 6.8
b よかった 中 70.7 高 56.7 全 63.3
c 短かすぎ 中 20.3 高 38.3 全 29.9

2. 休日を含めたことについて

- a 良かった 中 84.6 高 92.3 全 88.7

3. 準備がうまくいったと考えるもの

- 中 51.2 高 42.7 全 46.9

4. 文化祭全体をみて

- a 良かった 中 36.7 高 26.1 全 31.4

- b まあまあ 中 52.5 高 52.9 全 52.7
 c 良くない 中 10.8 高 21.0 全 15.9
5. 講演は
 a 良かった 中 65.6・高 74.7 全 70.2
 b まあまあ 中 28.5 高 19.3 全 24.0
 c 良くない 中 5.7 高 5.9 全 5.8
6. 映画を見た者 高 43.5
 (中学生は原則として全員参加とした)
 見なかった者のうち神田川なら見たらと答えた者 27.8
7. 演劇部公演を見たもの(半分以上を見たとする)
 中 5.3 高 14.9 全 9.6
8. 展示・部クラ発表を良かったというもの
 中 37.7 高 9.4 全 22.6
9. 個人発表・演奏を良かったというもの
 中 54.3 高 34.3 全 44.8
10. バザーを良かったという者(まあまあを含む)
 中 84.6 高 84.3 全 84.4
11. 音楽コンクールを良かったという者(まあまあを含む)
 高 87.9

以上4つの資料を分析してみると、面白い点に気づく。①準備過程に苦労があり、アンケート結果でも「準備がうまくいかなかった」というものが半数以上を占めるのに対し、文化祭全体としては90%近くの者が良かったという点。②実施前のアンケートでは、映画に人気集中しているのに、実際には、講演・音楽コンクールが良かったという者が多く、映画は見た者でさえ40%強しかない点。③本来の文化祭の姿である部クラ発表、展示よりも、個人発表、バザーに人気集まっている点。他にも気づくことはあるが、この3点について考えてみよう。①についてはこういう行事の当然の結果かもしれないが、準備という苦労過程は良い評価が得られないのに対し、当日の楽しさがそれを打ち消しているのではないか。実施前にも後にも、多くの生徒が文化祭を「楽しむ場」として考えている顕著なあらわれである。それは②、③についても言えよう。映画・バザーは楽しいもの、講演・合唱はつまらぬものという固定的概念が、生徒の心の片すみにあるのではないか。だが、準備過程であれほどエネルギーを示した映画に対しては、もし神田川を上映したとしても、見た割合は半数程度にすぎないこともわかった。閉じこめられた世界で楽しむよりも開放的にバザー等で楽しむ方にひかれるのである。生徒は文化祭を毎日の活動と全く切り離して考えている。受験に代表する閉じこめられた世界からの一時的な開放を求めているのである。教科活動はもちろん、部クラ活動にしても多くの生徒は閉じ込められている感を少しは

抱いているに違いない。その活動の発表の場である文化祭を、生徒が全く別物と考えてしまうことには、我々の毎日の教科指導、部クラ指導にも問題があるのではないか。しかし、これは簡単に解決はできない問題であり、後でもう少し大きいわくの中で考えてみることにする。

最後に、文化祭後に行った、文化委員会・生徒部での反省と今後の課題を報告として簡単に付しておく。

①準備がうまくいかなかったのは、文化委員会の積極性がないからだ。又、教官—文化委員会—各クラスのコミュニケーションが悪かった。生徒会・文化委員会・執行部、それに教官とがうまくかみ合っていなかった。まして、中・高合同で行う本校においては、各種団体の滞りない意志流通がほしい。準備が直前にならぬと軌道に乗らないのは、様々の理由があろうが、準備の集中、短縮を考えた方が効果上がるのではないか。それには時期をも含めて検討する必要がある。

②プログラム全般—2日半にして準備・後始末の時間を十分とることができ、うまく進行した。

③講演—希望のかつ話のわかりやすい人物をよべとても好評であり成功した。

④映画—文化祭にやるべきかどうか問題。

⑤バザー—その形態に問題があるのでは。

⑥部クラ発表、展示—そのエネルギーがバザー・個人発表に傾いてしまうせいか、数も少ないし、盛り上がり欠ける。(本年はこれを充実させる方針を文化委員会として打ち出していたのだが)。

⑦音楽コンクール—中・高ともかなり良好。

⑧文化講座(高)—初めての試みとしては、かなり良かった。ただ受身の者が多いのに問題。

⑨後始末、警備—良好、体日を含め2日半案を、内容に順じてとり入れていったことが、生徒の自覚を促したのだろう。

<資料5> 文化祭当日の外来者数とそのアンケート
 外来者数 一般406 父兄212

アンケート結果—バザー、個人発表の数は適当と答えている者が多く、展示は少ないという者が多い。又、会場の雰囲気は、普通、盛り上がっているという順。

(3) 私見—文化祭と学校とのかかわりあい

こうして文化祭という大きな行事を指導して痛感することは、それがすべての学校活動とかかわりを持ち又うまくかかわりを持つようにならなくてはならないということである。準備が滞った大きな原因に、直前に中間テストがあり、その前に体育大会があったことを多くの生徒が指摘した。又、文化祭独自のバザー、

個人発表が人気を博し、毎日の部クラ活動・学習活動の文化祭進入は、非常に少なかった。文化祭を生徒は毎日の学習活動と切り離して考えているようである。一体、文化祭はどういう形で行うのが最も望ましいのだろうか。

学芸的行事のねらいの一つに、「各教科などで学習した知識や技能を総合的に発表させることにより、より高度の知識・技能を習得させ、豊かな情操と広い教養の育成に資する」(学校教育全書)とある。つまり毎日の教科活動・部クラ活動そして学級活動が文化祭に協力し、参加し、それによってそれらの活動が促進してゆく、というのが、理想的な文化祭のあり方なのである。しかし、価値感等、多層化している現生徒に対して、そのすべてをその理想に近づけるのは不可能に近いのである。ここで具体例をあけてみよう。

本校野球部は、メンバーからいっても文化的行事には無関心なものが多かった。そして、偶然にも11月3日当日が、県新人戦の試合日となった。当然、当日までの日々は、時間の許す限り練習しなくてはいけないし、それが部活動本来の姿である。しかし、それが文化祭でのクラス活動、生徒会活動の足をひっぱる結果にもなりかねない。試合がなくとも、運動系部ならば練習の方に力を入れるのは当然だろう。ここに本来は部活動の発表、あるいは促進の場である文化祭と、それが逆の作用を及ぼし合うことになるのである。

又、教科活動に対しても、現カリキュラムにおいてそれが文化祭と協力、促進し合うのは相当無理があるし、まして中間テストともなれば、文化祭活動を中断せざるを得ない現状である。教科活動も先例と同様、理想とは逆の作用を及ぼしている面が、かなりあるのである。

そして教科活動と文化祭、部活動と文化祭を理想の形に近づけようとした時、おそらくその努力の割には生徒たちはやる気を示さないだろうし、かえって反発という形ではね返ってくる事が予想される。多くの生徒にとって文化祭は学ぶ場ではなく楽しむ場であり、極端に言えば一時的にいつもと違った楽しい活動のできる場と考えているわけである。文化祭だけはエレキギターを仲間と楽しめる。校内で仲間とカレーライスが食べられる。といった具合で、けっしてそれを音楽や家庭科学習の延長とは考えない。その典型的な例として、上手に演奏できるグループを呼びたいとか、すべて既製品でまかなってバザーをしたいとかいう考え

がでてくる。アンケートによると、70%以上の生徒が、バザーに関して売り手、買い手が楽しめさえすれば、その製品の製作過程には問題はない、と回答している。

しかし、我々はそのすべてを非として、文化祭は学習活動の延長の場だから、教科延長、部クラ延長を押しつけることはけっしてできない。押しつけという形ではけっして、その効果が上がらぬことは前に述べた通りであるし、自主性という柱を崩すことになる。「なるべく生徒みずからが計画をつくり、自主的に活動することを奨励するのが望ましい」(学習指導要領第3章・第2節)とあるように、特にこういった特別活動においては自主性の柱はまずしっかりさせなくてはいけない。そして自主性を維持させるためには、楽しみ、興味あるものにしていかなくてはならない。我々は常に楽しみ、興味と教科的内容・文化的内容とのバランスを考えなくてはならないのである。

そして文化祭指導の最大のポイントは、教科的内容文化的内容のものの中に、いかに最大多数の楽しみ、興味を発見させるかということであろう。本年、実施前は講演を行うのが良いと考えた者は半数程度だったのに対し、講演が良かったというのは、70%、まあまあ良かったを含めると94%にもなるのである。もし数字通りに、40%のものが本年度の講演という文化的内容のものの中に、新たに楽しみ、興味を発見したと考えたと、これは文化祭の教育活動における大きな成果といえよう。又音楽コンクールにしても、クラス対抗という企画、或は音楽の教科書ではなく、クラスの選曲、企画にまかせるという指導のもとに、楽しみ、興味を発見した生徒もかなりいるだろう。そういう楽しみは、自主的にわずかな時間をもさいて練習する、というすばらしい教育的価値を生み出すのである。決して70%のものが安易に楽しみだけを求めているわけではないのである。

生徒の自主性を柱に、楽しみ、興味を失わせないようにしながら、何らかの形で教科内容、文化内容を取り入れてゆくのが我々の役目である。「神田川」にも「エレキギター」にもバザーにも、その指導法によって多くの教育的価値を見出させると思う。又、自主性を柱に大きな教育的価値のあるものに、生徒の楽しみ、興味を導いてやるのももちろん我々の役目である。我々がその役目を果たしていくときに、文化祭と教科活動、部クラ活動の相互協力、相互促進が自ら生まれてくると信ずるのである。